

日本独自の教育システムの高等専門学校(高専)が生まれて60年近く。急速に進むデジタル化のなかで、高専教育や受け入れ側の産業界はどうあるべきなのか。自「高専応援団」と語る萩生田光一文部科学大臣に高専愛を大いに語ってもらった。

給与、大卒と同じ水準に

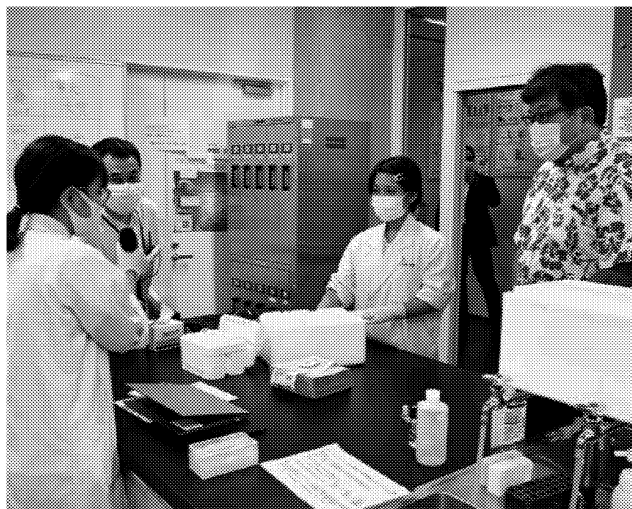


「応援団」萩生田文科相に聞く

「ロボコンだけでなく、高専生を対象としたコンテスト、コンペティションがいくつもあつて、課題に対して自分で作ってみたいという高専出身者がよくつとめる行動力、そこで磨かれる発想の柔軟性、想像力に可能性を感じる。全国にある各高専がそれぞれ独自に工夫を凝らし、素晴らしい学生を育てているのがよくわかった」

識を身に付けられる教科の充実を進めていく。世の中のフェーズが変わってきている

沖縄高専の生物化学実験室で学生から卒業研究について説明を受ける萩生田文科大臣(左) (文部科学省提供)



卒業生の活躍「見える化」を

「2020年度は医工分野、介護マテリアル分野の強化、底上げをしてきた。21年度は防災、減災だ。高専生の柔軟で自由な発想、アイデアで社会的な課題解決に取り組む術者養成の仕組みは高い評価をもらっている。日本独自の高等教育機関を海外で展開していくことが必要だ。新しい船は長い目で見れば日本のプレゼンスになる。最近では国立高等専門学校機構が主導してモンゴル、タイ、ベトナムに『KOS EN』が設立された」